仁平義明（2015）私の出前授業：出前授業はどれだけ「心理学」を代表できるか.
『心理学ワールド（日本心理学会）』, 71, 30-31.

出前授業はどれだけ「心理学」を代表できるか

白鷗大学教育学部 教授
仁平義明（にへい　よしあき）

「出前授業」担当者の誰もが解かなければならない難問があります。たった1時間の授業にどれだけ「心理学」の代表性を持たせられるかという問題です。

「高校生のための心理学講座」が始まるまで

白鷗大学では，日本心理学会「高校生のための心理学講座」がスタートした2012年度から3年間，「関東Ⅱ地区」の会場をお引き受けしてきました。講座が学会の事業として開設されるのに自分で積極的にかかわってきたからでしたが，開設の経緯を紹介しておきます。

2006年，日本学術会議「心理学教育プログラム検討分科会」（第20期）が設置されるとき，委員の一人として「高校生の心理学教育」を検討課題の一つに取り上げるよう提案しました。そこから，日本心理学会の常務理事会でも体系的な「高校生のための心理学講座」を全国的に始めるように進言しました。その結果，全国8地区で2日間6コマ（領域）にわたる講座が開設されるに至った次第です。今年度は，1日5コマ（領域）で北海道から沖縄まで全国14地区に広がりましたね。

その間，2010年には日本心理学会第74回大会では長谷川寿一先生とともにシンポジウム「高校生への心理学教育」を企画して，「高校生になぜ心理学教育をするか？—大学生と高校生の心理学教育の目標のちがい—」について話しました。講座開設の地ならしです。

高校生への心理学教育と「出前授業」の難しさ

高校生が心理学の授業を聴くのには何通りかの機会があります。一つは，「出前授業」。もう一つは，オープン・キャンパスでの「模擬」・「体験」授業。どちらも，たいていは1コマの授業です。内容は授業担当者の専門分野になることが多く，注意しないと高校生の心理学イメージは担当者の専門に影響されることになります。出前授業の最大の難しさは，たった1コマの授業に何らかの意味で「心理学」の代表性を持たせるという問題にあります。

一方，総合高校では正規の単位化された半年間あるいは一年間の授業として「心理学」が教えられています。届け出だけで「学校設定科目」が可能なので，とくに大都市部の総合高校で「心理学」の名を冠した授業が行われるようになりました。「心理学」という名前ではなく「カウンセリング入門」などが標榜される場合もあります。どちらかといえば「心理学」は関東，「カウンセリング入門」など臨床系の授業は関西という傾向がみられます。また，「心理学入門」という名称になっていても，内容は「エンカウンター・グループ」や「精神分析」などに比重を置いた講義になっていたりします。ここにも心理学の代表性の問題があります。この辺の事情は，仁平義明・高橋美保「高校生になぜ心理学教育をするのか—大学と高校の心理学教育の目標のちがい—」（白鷗大学教育学論集, 2011, 5, 93-114.）をご参照ください。

日本心理学会の「高校生のための心理学講座」が，どこかの領域だけに限らない多様な分野のテーマから構成するという基本方針をとった背景には，こうした事実がありました。

アメリカ心理学会「ハイスクール心理学全国標準カリキュラム」の示唆

日本の高校生に対する心理学教育のカリキュ

Profile—仁平義明
東北大学名誉教授。日本学術会議連携会員。専門は応用認知心理学。著書は『防災の心理学：ほんとうの安心とは何か』（編著，東信堂）。『百人のモナ・リザ：俳句から読む心理学』（単著，プレーン出版），『嘘の臨床・嘘の現場（現代のエスプリ481）』（編著，ぎょうせい），『ナラティヴから読み解くリジリエンス』（共訳，北大路書房）など。

ラムを考えるうえで，参考になるのはアメリカ心理学会（APA）の「ハイスクール心理学全国標準カリキュラム」（National Standards for High School Psychology Curricula）です。

現在の2011年版では，ハイスクール心理学教育の基本的な領域として次の7領域（Domains），合計20単元の内容が提案されています。

①「科学的探究の領域」（単元：心の科学という視点，研究法，測定と統計）
②「生物学的心理学の領域」（単元：行動の生物学的基礎，感覚・知覚，意識）
③「発達と学習の領域」（単元：生涯発達，学習，言語の発達）
④「社会文化的文脈の領域」（単元：対人相互作用，社会文化的多様性）
⑤「認知の領域」（単元：記憶，思考，知能）
⑥「個人のバリエーションの領域」（単元：動機づけ，情動，パーソナリティ，心の障害）
⑦「心の科学の応用の領域」（単元：心の障害の治療，健康，職業上の問題への応用）

2005年版では5領域15単元でしたから，領域と単元は分化してきています。

7領域20単元となると，半期ですべての領域を同じ比重で扱うのは無理です。そこでAPAは，少なくとも7領域はつねにカバーして「心理学」の代表性を保持しながら，生徒の関心にあわせてどの領域かの単元を多く扱うという方法を提案しています。

また，ハイスクール心理学を教えるうえで「考慮すべき重要なポイント」についても，いくつかの示唆がされています。

1. どの領域を教えるにも「多様性」という考え方を忘れないこと。

文化の多様性，個人差としての多様性，人種，ジェンダーの同一性，障害，宗教，加齢，さまざまな面の多様性に注意を払うことです。

2. 心理学のグローバルな学問としての性格を明示すること。

西洋文化内での研究の知見は西洋以外でのものと現象が異なっていることがよくある。そのことに注意を喚起させようというのです。

3. アクティブ・ラーニングを利用すること。

シミュレーション，デモンストレーション，ディスカッション，検査の自己実施，調査や実験の体験，こういう学習法は，心理学は他の学問より得意です。

4. 授業プランを作成するときに，多くのリソースを利用すること。

APAはハイスクール心理学の担当者のために，スライド集や指導案など，さまざまな教材を用意しています。日本でも高校生への心理学教育が根づくためには，学会による教材の開発・提供が不可欠になるでしょう。

私の体験授業

出前授業は，「自分の得意分野で高校生が興味を持ちそうなテーマについて，わかりやすく楽しい授業をする」というのでは不十分です。たった1時間の授業に，どうしたら心理学教育の代表性を持たせられるか。8月のオープン・キャンパスの体験授業で試してみました。題して「ゼミ生が自分たちで研究した“心理学おもしろテーマ”集」。話すのはゼミの3年生。文化と進化など複数の領域の問題と「考慮すべきポイント」を組み込んだのが，工夫です。左上写真は「テーマ集」のうちの一つです。